

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32631

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590240

研究課題名(和文)食物アレルギー，感染症，自然災害等の保健・安全問題に対する教員の力量とその形成

研究課題名(英文)Teacher ability and its nurturing against health and safety problems such as food allergies, infectious diseases, natural disasters

研究代表者

植田 誠治 (UEDA, Seiji)

聖心女子大学・文学部・教授

研究者番号：90193804

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：現職教員の保健・安全のニーズ調査とヒヤリ・ハット体験の調査を実施し，それに基づく教員養成のためのモデルカリキュラムを作成した。発達障害への対応，心のケア，けがの応急手当，心肺蘇生法，AED，エピペン，保護者との連携に加えて，アレルギー疾患への対応，熱中症への対応，過呼吸への対応，慢性疾患への対応，感染症への対応，などの内容を含んだ教員の保健・安全の力量を形成する教員養成カリキュラムが必要と考えられた。

研究成果の概要(英文)：We conducted a survey on health and safety needs and "Hiyari and Hatto experience (health and safety incident)" of incumbent teachers. Then we created a model curriculum for teacher training based on that. It is thought that a teacher training curriculum that forms the teacher's health and safety competence including contents such as collaboration with developmental disorders, mental health care, injury emergency first aid, cardiopulmonary resuscitation method, how to use AED, how to use EpiPen (epinephrine injection), relation with parents, allergic diseases, heat disturbance, hyperventilation, chronic disease, and infectious disease.

研究分野：学校保健学

キーワード：教員 保健・安全 ニーズ調査 ヒヤリ・ハット体験 教員養成カリキュラム

1. 研究開始当初の背景

(1) 学校給食による食物アレルギーの事故 , インフルエンザやはしかなどの感染症の拡大 , 阪神淡路大震災や東日本大震災にみられるような自然災害 , さらに学校への不審者の侵入による事件や事故などが起こり , その際の教員や学校の対応のあり方 , またその予防対策のあり方が課題となっている。一方 , 「学校保健安全法」では学校保健および学校安全に関して , 各学校において共通に取り組む事項が示され , その推進となる全ての教員の資質・能力の向上が急務となっている。

このような状況をふまえ「教師に求められる学校保健・安全の基本的な資質・能力の形成」(日本学校保健学会第 60 回学術大会シンポジウム) が検討されるに至っているが , このような資質・能力の向上のためには , まず今 , 教員の持つ学校保健・安全のニーズを明らかにすることが必要である。

(2) 筆者らは , これまで学校における保健・安全管理と教育の実践の実態や推進方法についての研究を進めてきた。一方 , 国際的には , 世界保健機関の主導を踏まえ , ヘルシースクールやセイフティスクールの名のもとに , 児童生徒の保健・安全に対する推進活動が盛んとなり , その中で教員の資質や能力の向上が図られてきている。しかしながら , これらの研究が保健体育教員 , 養護教諭といった学校の保健・安全を専門とする教員を対象としたものに偏っていることは否めない。

2. 研究の目的

本研究の目的は , 現職教員の保健・安全に関するニーズ調査とヒヤリ・ハット体験の調査を行い , その結果に基づく全ての教員に必要な保健・安全の力量を形成するためのモデルカリキュラムを作成することである。

3. 研究の方法

(1) 現職教員の保健・安全に関するニーズについて , 「苦慮した経験の有無」と「大

学で学んでおくべきか」について , 学校長の協力許可の得られた 10 都府県 102 校 (小 37 , 中 31 , 高 31 , 小中 1 , 中高 1 , 特別支援 1) に依頼し 2015 年 3 月に各学校へ配布 , 1905 名の教員を対象に , 3 月末を締め切りとする郵送法にて調査を行った。対象は学級担任とし , 無記名方式で実施した。回答者は 1283 名 (回答率 67.3%) であり , その内訳は , 表 1 のとおりである。

表 1 回答者の内訳

性別	n	%
男性	626	48.8
女性	645	50.3
無回答	12	0.9
合計	1,283	100.0

「苦慮した経験の有無」と「大学で学んでおくべきか」について質問した内容は , 「健康観察の仕方」, 「けがの応急手当」, 「熱中症の対応」, 「心肺蘇生法」, 「AED の使い方」, 「アレルギー疾患への対応」, 「アナフィラキシー時のエピペンの使い方」, 「過呼吸への対応」, 「起立性調節障害への対応」, 「摂食障害への対応」, 「感染症への対応」, 「慢性疾患への対応」, 「心のケア」, 「学校での健康診断における教師の役割」, 「発達障害への対応」, 「教室の環境衛生」, 「自然災害で被災した際の対応」, 「自然災害での防災の対応」, 「保健に関する保護者との連携」, 「安全に関する保護者との連携」, 「保健に関する教員同士の連携」, 「安全に関する教員同士の連携」, 「保健に関する養護教諭との連携」, 「安全に関する養護教諭との連」の 24 項目である。

(2) 現職教員の保健・安全に関するヒヤリ・ハット体験について , 保健・安全に関す

る「苦慮した経験の有無」と「大学で学んでおくべきか」についての質問項目の後に、次のように質問し、自由回答にて調査した。

質問内容：あなた自身が、児童生徒等の保健・安全に関連して、これまでに経験した「ヒヤリ・ハット体験」を教えてください。「ヒヤリ・ハット体験」とは、重大な事故には至らなかったものの、重大な事故につながってもおかしくなかった一歩手前の事例のこととします。そのように思われた事例を、できるだけあげてください。

例) 給食に出た牛乳をこぼしてしまった児童がいた。となりの席の乳アレルギー 児童の脚に付着していることに気付かず、午後の授業中に児童の気分が悪くなり、また該当部分にじんましんが出た。幸い大事には至らなかった。

(3) 現職教員の保健・安全に関するニーズ調査と「ヒヤリ・ハット体験」の調査結果に基づき、教員養成段階でのモデルカリキュラム案を作成した。

4. 研究成果

(1) 現職教員の保健・安全に関するニーズ 苦慮した経験

保健・安全に関して、これまでに苦慮した経験があると回答した割合について図1に示した。

「発達障害への対応」、「心のケア」で苦慮した経験は、それぞれ 87.1%、78.5%と割合が高い。また「けがの応急手当」の割合も 56.3%と比較的高かった。

「心肺蘇生法」、「エピペン」、「AED」で苦慮した経験は、それぞれ 6.8%、6.7%、4.8%であった。

また、連携では、保護者、教員間、養護教諭の順で苦慮した経験が高かった。

さらに、学校種別によって傾向が異なる点でも特徴が認められた。

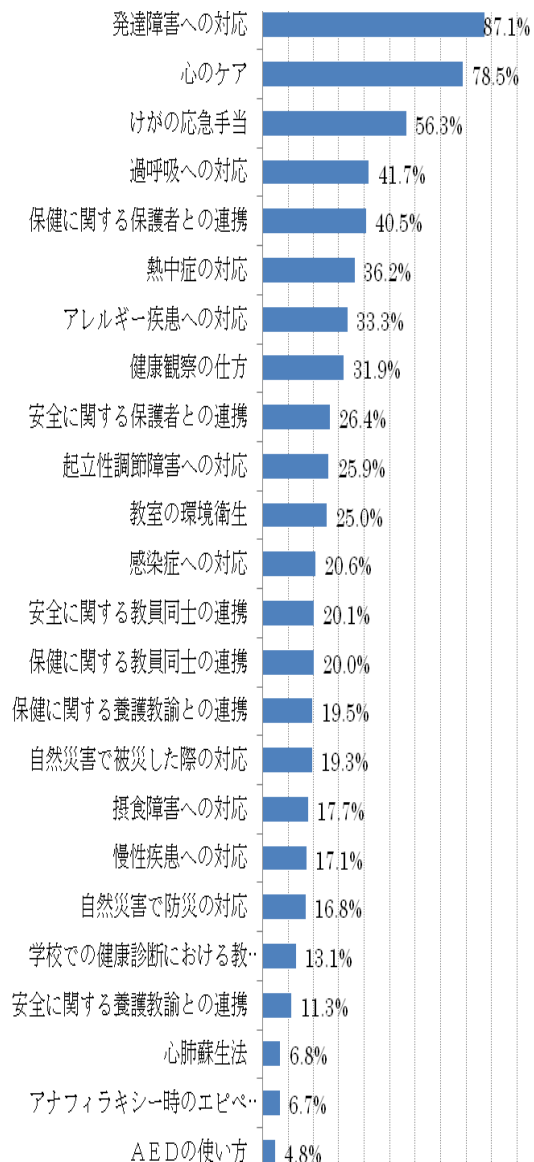


図1 これまでに苦慮した経験があると回答した割合 (N = 1,283)

大学で学んでおくべきか

保健・安全に関して、大学で学んでおくべきかどうかに対する回答の割合について図2に示した。

「発達障害への対応」、「心のケア」は、苦慮経験と同様に高かった。

「心肺蘇生法」、「エピペン」、「AED」は、苦慮経験は低いですが、大学で学んでおくべきと思う割合が高かった。

さらに、学校種別によって学んでおくべきとする内容が異なっていた。

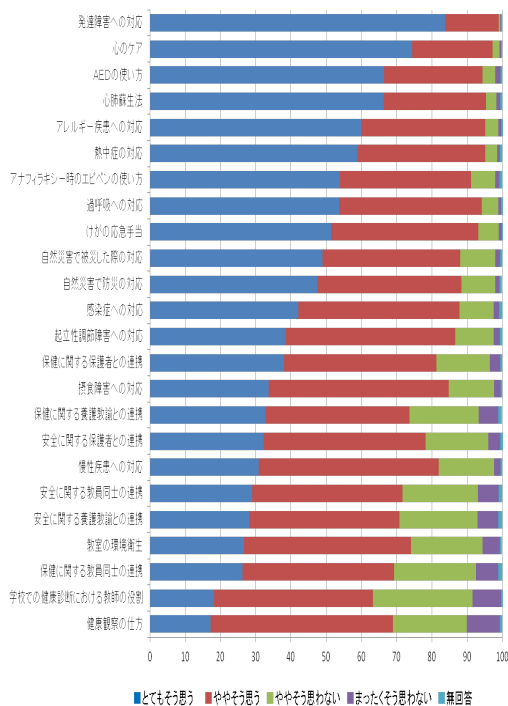


図2 大学で学んでおくべきか

(2) 現職教員の保健・安全に関する「ヒヤリ・ハット体験」

教員の保健・安全の「ヒヤリ・ハット体験」(重大な事故には至らなかったものの、重大な事故につながってもおかしくなかった一歩手前の事例)事例数を、表2に示した。

「ヒヤリ・ハット体験」の事例が多かったのは、「けがの応急手当」、「アレルギー疾患への対応」であった。

「熱中症の対応」、「過呼吸への対応」、「感染症への対応」、「慢性疾患への対応」、「発達障害への対応」については、小・中・高いずれの校種においても事例が認められた。

さらに、高校において「心のケア」に関わる事例が複数認められた。

また、「心肺蘇生法」、「AEDの使い方」、「起立性調節障害への対応」、「摂食障害への対応」、「自然災害で被災した際の対応」、「自然災害での防災の対応」、「安全に関する教員同士の連携」などにも事例が認められた。

表2 教員の保健・安全の「ヒヤリ・ハット体験」事例数

()内は、小学校・中学校・高校・特別支援学校の順

・けがの応急手当 (50・29・40・6)	・心のケア (0・1・6・0)
・熱中症の対応 (6・4・15・0)	・発達障害への対応 (2・5・3・0)
・心肺蘇生法 (0・0・3・0)	・自然災害で被災した際の対応 (1・0・0・0)
・AEDの使い方 (0・1・0・0)	・自然災害で防災の対応 (0・1・0・0)
・アレルギー疾患への対応 (47・29・23・0)	・安全に関する教員同士の連携 (1・0・0・0)
・過呼吸への対応 (1・5・5・0)	・その他 (5・2・9・2)
・起立性調節障害への対応 (1・0・3・0)	・ブルドッグ、蚊、蜂、刺傷、ストローク、ビル崩落、テートDV、不審者、薬品(廃油石炭)、悪天候、ヘリウムガスなど
・摂食障害への対応 (0・0・2・0)	
・感染症への対応 (2・1・3・0)	
・慢性疾患への対応 (6・6・9・0)	

(3) 教員養成段階における保健・安全のカリキュラム・モデル案

現職教員を対象とする保健・安全のニーズ調査の結果、ならびに教員の「ヒヤリ・ハット体験」の事例の分析に基づき、教員養成段階で行う15コマの授業のカリキュラムを専門家の助言を得ながら仮説的に作成し、授業を実施した。

授業の目標は「現職教員の持つ保健・安全のニーズと「ヒヤリ・ハット体験」の調査データに基づき、担任教師に必要性が高いと考えられる内容について、その基本的な文献を予備的に学習するとともに、実際の教育現場での事例に対応できる基本的な力量を形成する」である。

そして、1. 教師に求められる学校保健・安全の基本的な資質・能力とは、2. 教育としての学校保健・安全 - 子供の健康・安全を守る、発育・発達を保障する、保健・安全の認識を高める -、3. 子供の健康・安全を守る活動、健康観察の視点(1)、4. 子供の健康・安全を守る活動、健康観察の視点(2)、疾病管理、5. 応急手当(1)、6. 応急手当(2) 7. 学校におけるアレルギー疾患児童への対応(1)、8. 学校におけるアレルギー

ギー疾患児童への対応(2), 9. 子供のストレスと心身の課題(1), 10. 子供のストレスと心身の課題(2), 11. 発達障害への支援(1), 12. 発達障害への支援(2), 13. 自然災害への対応(1), 14. 自然災害への対応(2), 15. 学校保健・安全における連携, の内容の授業を実施した。

本研究において, 現職教員の保健・安全ニーズと「ヒヤリ・ハット体験」を明らかにし, それに基づく教員養成のカリキュラムの提示をしたが, これは本邦初の成果である。学校における保健・安全の推進には, 全教員の資質・能力の向上が必要であり, その方向性を示すものとなっている。今回のカリキュラムは試行的な段階にとどまっており, 評価ならびに評価指標, 評価手段の精査が今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(2) [学会発表] (計3件)

植田誠治, 学校保健のフロンティア - 未来に生きる子どもたちの健康を守り育てる -, 第20回千葉県学校保健学会年次大会, 2016年12月10日, 聖徳大学(千葉県・松戸市)

植田誠治, 杉崎弘周, 物部博文, 衛藤隆, 教員の保健・安全の「ヒヤリ・ハット体験」, (一社)日本学校保健学会第63回学術大会, 2016年11月20日, 筑波大学(茨城県・つくば市)

植田誠治, 杉崎弘周, 物部博文, 衛藤隆, 教員の持つ保健・安全のニーズ, (一社)日本学校保健学会第62回学術大会, 2015年11月28日, 岡山コンベンションセンター(岡山県・岡山市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

植田 誠治 (UEDA, Seiji)
聖心女子大学・文学部・教授
研究者番号: 90193804

(2) 連携研究者

衛藤 隆 (ETO, Takashi)
東京大学・名誉教授
研究者番号: 20143464

物部 博文 (MONOBE, Hirofumi)
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号: 30345467

杉崎 弘周 (SUGISAKI, Koshu)
新潟医療福祉大学・健康科学部・准教授
研究者番号: 30612741